- 孤高の書人 -
近藤撰南の世界

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
川崎 宏祐

本論文の目的は、昭和から平成時代にかけて活躍した現代書家・近藤撰南(1922 - 2009)の世界を探求することである。彼の書、さらに言えば生き方に対する思想に寄り添い、撰南独自の書論を繙いていく。

撰南の作品には不思議な力が漲っており、我々の心を魅了し続ける。「書は人なり」という言葉があるが、もしそうだとするならば、撰南の人物像に惹かれているということになる。彼の作品が多くの人々の心を魅了し、そのなかに受け入れられてきたのは、その作品に彼の確固たる書道観や人生観が包摂され、作品を通してその人柄や思想が共感されたからではないだろうか。過去の書家の生き方を学ぶことは新たな知識を学ぶことであり、さらに新たな見解を生み出していく原動力となる。ここに本研究の意義がある。

本論文は全章にわたり、文献研究によって論述を展開した。撰南の語った言葉の多くは、新書派協会の機関誌『書』とその関連書籍、そして撰南の著書である『日本の言葉を書く 漢字かな交じりの書』とそのビデオのインタビューから引用した。

第1章「孤高の書人 近藤撰南」では近藤撰南の生涯を概観した。平成3年に日本芸術院賞を受賞するなど、日本書壇を構築してきた人物の一人である。津金雀仙とのあたたかな交流、そして自身の理想とする書の創造を目指した「新書派協会」の創立を通して、撰南は生涯にわたり書の道を邁進した。

第2章、第3章では撰南芸術の根本思想である「現代的書美の創造」「たゆみなき古典の書美の探求」について探求した。撰南が目指したのは新旧の二元を越え、歴史や時間を越えた新しさを秘めた現代の書作品である。その創造のためには古典の裏づけが必要であった。書には3500年という茫漠たる歴史があり、この背景を抜きに自分の考えや意図を前面に打ち出すと、それは単なる我流でしかない。撰南にとっての古典とは、現代の書を創作するにあたり、歴史的視点から「普遍的生命」を与えるための確固たる根源であった。そして、古典を学ぶ臨書において、撰南は「どこまでも自己というものを無にして、自分が古典の中に入りこんでいく」という、生涯を通して不変の臨書観を懐いていた。ただただ古典に徹底する。ここに撰南特有の価値観がある。

第4章では「近藤撰南の書道観」を考察した。撰南が作品制作にあたり、「感動」「無心・忘我」「率意」を大切にしたのは、心のあり方で作品が変わっていくからである。これらの心の動きは撰南にとっての創造の原点であり、新しい自分と出会う起点であった。そこから生まれた書こそ真に価値ある「私の書」であり、そこに向かう心のあり方そのものが「心の昇華」へとつながっていた。技術も意識も越え、湧き出すように書いた作品にこそ作家の心が感じられ、観者の心との共鳴があると、撰南は信じていたのである。